

## 感情の先取りという実効性

片岡 絢

『おかえり、いつてらっしやい』を通して

### ●はじめに

短歌が趣味というと、短歌を知らない人からは、「高尚ですな」と言われたりして、だいぶイメージの一人歩きだなあと思う。私の思う短歌は、生々しくて泥臭くてリアルで、日常に直結したものである。日常の役に立つものである。

前田康子の第六歌集『おかえり、いつてらっしやい』を読んだ。子育てがひと段落した頃の作品群である。読者の私にとっては、人生経験を重ねられている先輩歌人である。読んで楽しかった、というだけではなく、少し年代の下の自分が読むことの実際の効用を、読み進めていくうちに改めて感じた。とりわけ、自分も遠からず直面するだろう出来事を詠んだ歌が、他人事と思えず胸に迫ってきた。

### ●親の歌

母というのは、ある時期には絶対の存在であった人であり、そしておそらく子どもにかなりの影響を与える存在である。その関係性自体なるといふか切ない。その母が病気になる。

大病をするとは知らず次の日の上着を母は  
部屋につるして

会うたびにどこから来たの 朝顔の頃あな  
たからこぼれ落ちたよ  
父にまだ少し嫌味を言える母に家族は笑う  
冬の日射しほど

老いた母を囲む家族。母に嫌味を言える元気がある安堵と、安堵と感じてしまうことの淋しさが、弱々しい冬の日射しという、身近な淡いものに譬えられている。

手間暇をかけてといつも言いし母 指赤く  
して胡瓜を塩揉む

出来上がればきれいに消えし手間暇よ小さ  
な椀のカボチャのすうぶ

家事を丁寧に行っていたお母様の様子がわかる。作者もそれをそのまま受け継いでいる。手間暇は、完成時には消えてなくなる。手間暇をかけた側に達成感はあるが、それは必ずしも相手に伝わっているかはわからない、完成品だけが物語るといふことを、やわらかく詠んでいる。

### ●老いてゆくこと

老眼鏡をシニアグラスと言い直し少し先へ

と老いを延ばせり

ペン習字上達本に書き続くいつか俗名とな  
らむ我が名を

齢とともに子宮も縮んでゆくといい 子ら  
ぼっかりと揺れていたのに

一首目、シニアグラスという言葉は素敵だ。二首目、自分の名を繰り返して書いているうちに、その名がいつかは「俗名」になることを思う。昔は考えもなかったことを自然と「思うようになるのだらう。三首目、生殖に関わる臓器は役目を終えていくが、時折、在りし日のことを思い出す。

### ●子どもの歌

作者の二人の子どもも大きくなって、成人する。

変な名の居酒屋「んごろんごろ」に再び行  
けず子の去りしのち

ちよこまかと私の時間のすきまへと入り込  
んでた子らもうおらず

身籠りし歳月だけがくきやかなり枯れ紫陽  
花に陽光しみゆく

「んごろんごろ」という面白い名の店には、子どもと一緒でないが入りづらい。店名が思い出となる。二首目、子どもは大きくなると、ちよこまかと入り込んで来なくなるのか、とわかる。短い時の貴重さを教えてくれる。三首目、身籠っていた歳月「だけが」の強調と、三首目「くきやかなり」の字余りが、きっぱりとして気持ちよい。紫陽花は枯れてしま

うと愛でもらえないような印象があるが、その枯れ紫陽花を見届けるかのように、そしてひかりを沁みこませると詠む視線が細やかで優しく、草花を身近とする作者らしい。

酔うこともなくひたすらに東京を日本を小  
声で罵れり子は

見送りはいいよと言えば片手あげ人ごみに  
すぐのまれゆきたり

夜行バスもう新宿に着くころなり博徒のよ  
うな目つきに去りて

離れ住む子の声聞きつつ母というただ古ほ  
けたお守りとなる

東京で暮らす子の歌。遠い地でなんとか頑張っている若者の姿と、それをほらはら見守る母親の姿がありありと浮かぶ歌である。四首目の、母は古ぼけたお守りという表現は、とても言い得ている。成人した子からは、直接的な手助けを必要とされなくなる。もはやお守りのような作用しかない、それでも母は、唯一にして絶大なお守りだと思ふ。

猫のごと風知草撫で玄関にしばらく友と子  
のこと話す

風知草は、草がふあさつとしていて、いかにも撫でやすい。玄関で立ち話をするような、昔からの近所の友だろうか。子の話題は、まるで天気の話のように自然にあがる。さまざまな家の、玄関での立ち話を思う。

幼き日眺めし星の砂の壇我に返して子は出  
て行けり

おかえりといつてらっしゃい言えぬ場所へ  
子ら二人とも行ってしまえり

就職活動をしていた子も家を出ていく。一首目の「星の砂の塚」、作者にとつてはただの飾り物ではなく、幼かった子が眺めていた、思い出の品である。子どもにとつてはそれほどでもなくて、「これ返すね」とあつさり母に手渡したのかもされない。返されたときの作者の軽い衝撃を想像するとぐつときてしまう。三首目、歌集のタイトルにもなっている、「おかえり」と「いつてらっしゃい」、一緒に住んでいれば幾度も繰り返されるありふれた挨拶だが、子が巣立ったとたん、もう言うことができない言葉となる。あんなに近くにいたのに。何気ない挨拶であつても、一過性のものなのだ。

### ●コロナ禍へ

マスクすれどコリアンダーは匂いたり日の

暮れ一乗寺商店街に

一乗寺商店街という固有名詞が、行ったことのないその商店街と、読者の思い浮かべる商店街とを結びつける。生活の一場面である。夕暮れの商店街の匂いは懐かしい。

オンライン会議始まる五分前 淡きブラウ

スに着替えて待てり

たちまち浸透したオンライン会議にも準備が必要であり、なんとなく作法もあり、個性も出る。きちんとブラウスを選んでいところが作者らしく、控えめで可愛らしい。

カウンターのアクリル板やビニールシートにもすつかり慣

れた昨今、「ビニールシートの下から手を差し出しお金を払う」という詞書のある次の歌、

まちがった方の手を出すキツネの子 混じ

りておらむ春の日のレジ

新美南吉の童話『手ぶくろを買いに』の名場面を連想している。童話の持つ温かさとともに、ビニールシート越しのやり取りを、そんなふうにも捉えられるのかという驚きとうれしさがある。

体温を他人に知られ店に入る影売る男の話  
のように

店先の体温測定にもすつかり慣れた。ここでは『影を売る男』という話を連想している。コロナ禍などという状況下においても、書物や映画の知識があると、ふいにそれが顔を出して、場面を豊かなものにしてくれるのだと思つた。

### ●命の歌

ひとつきりのひとの命を思うときウスイロ

ツユクサただうつむけり

逝きし義母に誕生日来て川はらの草紅葉す

るエノコロを摘む

死というものは必ずやってくるので、思うことはたくさんあつても、あれこれ語ったりあがいたりしてもどうしようもできない。だから作者は静かに植物に託して詠む。植物の、あるがままに思いを受け止めてくれる姿が際立つ。

## ● 病の歌

ステージ0の病名ふいに渡されて右へ左へ  
玉がころがる

シンプルに母が願いてつけし名もこの頃効  
力うすれてきたり

咲いているのか咲いてないのかペランダの  
花たち黒い もう朝なのに

ひらく前の蓮の蕾のぼつてりと乳房に似た  
り もうすぐ切らる

歌集の終盤、自身が病を告げられたことの歌が登場する。

どの歌も挙げたいぐらい、胸に沁みてくる。あとがきには、「私自身もステージが低いとはいえ病を経験し、それが歌作りや人生にどんな影響を与えるのか見つけているところである。」とある。長年歌を作り続けている歌人が、大きな事象に出会ったとき、淡々と向き合うための姿勢の手本のようである。そんななか、作者にとっても、読者にとっても、発想の転換によって救われるような次の一首。

日の暮れは桔梗色なり 借り物の身体と思  
えばふわりと軽し

手術後の歌も、慎重に細やかに詠まれる。

家中の刃物がこちらを向いてるよう 術後  
の身体丸めて眠る

附子のごとマヌカハニーを舐め続けひとの  
帰りを待つ秋の暮れ

病室の窓から見えいしレストランたずねて

みればシーシャ売る店

これまでの作品からは、作者の落ち着いた人柄が滲み出ていた。しかし病を得た作者は、狂言『附子』の太郎冠者次郎冠者のような振る舞いをする。作者像とのギャップのおかしみ、そして哀しみ。「シーシャ」は水たばこのことである。

縫い傷に細く冷たく沁みてゆくコップの水  
は喉を過ぎて

（放射線を当てられる間考えること）を考  
えている市バスに

一五〇人待ちなる病院会計に誰とも視線の  
合わず座れり

聞いてほしいことと聞かれたくないことを  
星座のように分けつつ坐る

おそらく、誰もが似たような感情を抱いたことはあるだろう。それにしても、感情を的確に可視化できることの強さ。

## ● おわりに

私にも遠からずやってくる、親のこと、老い、子の巣立ち、そして病。実際に身をもってひと足先に経験をした歌人が、こうして歌を詠んでくれている。先輩歌人の歌を読まない手はない。感情を先取ることで、いつかそれに直面した時の心の準備が自然とできるという実効性がある。それはあるとき自分を支えてくれる。短歌は日常の役に立つ。

歌集の装丁も、内容に寄り添い優しさに溢れていて、素晴らしかった。この歌集に出会えたことを幸運だと思う。